

# 情報化社会の学びの意味を問う

—情報の「発信型」「受信型」から「発信型」へ—

「広島大学大学院教育学研究科教授」

森 敏昭

## 情報化社会とは

情報化社会という言葉が語られるようになったのは、それほど昔のことではない。しかし、その比較的短い期間に、情報化社会は急速に発展した。おそらく、この流れは今後さらに加速し、それほど遠くない将来には、世界中の学校がインターネットで結ばれる時代がやって来るであろう。

そうした情報化社会の急速な発展を支えているのは、言うまでもなくコンピュータ技術の急速な進歩である。実際、コンピュータの進歩は目覚ましく、最近では百科事典をそっくり一枚のディスクに収めたり、必要な情報を高速度で検索することも可能になった。記憶容量と情報処理のスピードに関しては、既にコンピュータの方が人間をはるかに凌駕しているといっても決して

過言ではない。したがって、来るべき本格的な情報化社会に生きる教師にとって、コンピュータを上手に使いこなすことは必須の技能になるであろう。しかし、それよりもさらに大切なことがある。それは情報化社会の本質をしっかりと見抜くことである。

「情報」という言葉の意味を手元の国語辞典(三省堂)で調べてみると、「人の知りたいことや、人に知らせたいことを伝達できる形にまとめたもの」と説明されている。もし「情報」をこのように定義するのであれば、人類は太古の昔から情報伝達を行っていたことになる。しかし、情報伝達のためのメディアは、太古の昔に比べると飛躍的な進歩を遂げ、前世紀には情報を電波に乗せて運ぶという画期的な技術が開発された。すなわち、ラジオやテレビの発明によって、情報を一瞬のうちに世界の隅々

にまで伝えることが可能になったのである。

このラジオやテレビの普及は、新聞、本、雑誌の普及と相まって、マスコミュニケーション(マスコミ)の社会を生み出した。しかし、「マスコミ社会」≠「情報化社会」ではない。なぜなら、コンピュータの普及が情報伝達の様式を根本的に変えてしまったからである。では、マスコミ社会と情報化社会とは、情報伝達の様式がどのように違っているのだろうか。実はこの点こそ、情報化社会の本質を見抜くための重要な鍵が隠されているのである。

## ツリーとリズム

情報化社会の情報伝達の特徴は「双方向性」である。つまり、情報化社会では、世界中のどこからでも情報の発信と受信の両方ができる。これに対しマスコミ社会では、情報は一方へしか流れない。情報の発信ができるのは新聞社や放送局に関係する少数の人々であり、その他大勢の人々は、ただ電波や活字によって送られてくる情報を受信するだけなのである。

情報伝達の様式が一方から双方方向へと変わったことによって、今まさに知の様式や社会構造までもが時代の大転換期を迎えようとしている。そのこの意味を説明す

るために、ここでポストモダンの思想家ド  
ルーズの言説を紹介してみよう。

樹木を眺めると、まず幹があり、幹から  
枝が分かれ、さらにその先に葉が茂り、花  
を咲かせ実を結ぶ。ドルーズによると、  
デカルト以来の近代思想においては、哲学、  
自然科学、社会科学などあらゆる知の体系  
がこのようなツリー構造（樹木状組織）を  
モデルにしているという。一例をあげれば、  
生物進化の系統樹は、まさに樹木状の階層  
構造を成している。これに対し、リズム  
（根茎）には、こうした階層構造はない。  
そこには上位もなければ下位もない。中心  
もなければ周辺もない。ちょうどカンナの  
地下茎のように、途中に結実点を作りなが  
ら多方向へ延びていく網状組織を成してい  
る。人間の知性も、このような網状組織と  
して捉えるべきである。なぜなら、脳の神  
経回路はリズムであり、知的活動は網状  
の神経回路上のインパルスの躍動に他な  
らないからである。

ドルーズは人間の思考様式や社会組織  
の背後にあってこれらを規定しているツリ  
ーを批判し、リズムの復権を主張してい  
るのであるが、今まさにツリー構造の社会  
からリズム構造の社会への転換がなされ  
ようとしている。ツリー構造の社会とは、  
言い換えればヒエラルキー構造の社会であ  
る。ヒエラルキー構造の社会では、富と権

力を手に入れた少数の人間だけが情報の発  
信を行い、その他大勢の庶民は権力者が発  
した情報を受信するだけである。これに対  
しインターネットが生み出した情報化社会  
はリズム構造の社会であり、情報を発  
信・受信する機会が社会の構成員の全員に  
平等に与えられている。したがって、これ  
からの情報化社会では、世界の隅々にまで  
ネットワークを拡張、多様なネットワーク  
を通して多様な情報を受信し、それに基づ  
いて付加価値の高い情報を創出し、さらに  
それを世界に向けて発信することが重要に  
なるであろう。

### 情報化社会の学びのあるべき姿

社会の構造がツリーからリズムへと変  
われば、当然のことながら学びの様式も変  
わるべきである。ところが、今なお多くの  
学校では、教師が子どもたちに一定の知識  
を教え込むという形の学習指導がなされて  
いる。しかし、そうした教師主導型の学習  
指導によつては、情報化社会で求められて  
いる「主体的に生きる力としての学力」、  
すなわち自己教育力の育成は望めない。な  
ぜなら、そのような知識伝達型の学習指導  
の下での学習活動は、教師から与えられる  
知識を一方向的に吸収するだけの受動的なも  
のになりがちだからである。

この受動的学力とは、換言すれば「情報  
受信型」の学力である。例えば外国語教育  
の場合を考えてみよう。日本の外国語教育  
では、伝統的に「読む力」「書く力」「聞く  
力」「話す力」のうち、特に「読む力」に  
重点を置いた学習指導がなされてきた。し  
かし、このような学習指導では、理解中心  
の「情報受信型」の語学力しか育たない。  
これに対し、これからの外国語教育に求め  
られているのは、諸外国の文化を理解する  
だけでなく、自分の考えや意見を外国人に  
伝えることのできる国際コミュニケーション  
能力としての語学力である。つまり、  
「理解」中心の「情報受信型」の語学力だ  
けでなく、「表現」も重視する「情報発信  
型」の語学力の育成が求められているので  
ある。そして、このことは決して外国語教  
育に限ったことではなく、他の教科の学習  
指導においても、同様に情報発信型の学力  
の育成が重視されるべきである。なぜなら、  
これからの情報化社会では、情報を発信す  
ることの重要性が、ますます高まってくる  
と考えられるからである。

情報の発信は、情報処理過程の最後のス  
テップであると同時に、次のステップの始  
まりでもある。つまり、発信された情報は  
他者に受信され、次の情報処理過程の第一  
ステップが始まるのである。このようにし  
て情報の受信・発信のサイクルが次々と網

の目のようにつながって、情報化社会のネットワークを形成する。このネットワークは、いわば情報化社会という生命体の毛細血管である。この毛細血管に沿って情報という血液が流れることによって、初めて情報化社会の生命活動が維持される。その生命活動が文化を創出し、文明を開花させるのである。このように考えると、情報の発信が情報化社会にとっていかに重要であるかがわかるであろう。もし仮に情報を発信する人が一人もいなくなったならば、それは情報化社会という生命体の死を意味しているのである。教室も小さいながらも一つの情報化社会であり、学びのネットワーク社会である。したがって、一人ひとりの子どもたちの伸びやかな表現活動によって、この小さな情報化社会の生命活動が維持されるのである。

### 表現力を育む学習指導

以上の説明で明らかのように、情報を発信する力、すなわち表現力を育成することは、情報化社会の学びにおいて極めて重要な意味を持っている。そこで最後に、表現力の学習指導を行う際の留意点について述べておくことにしよう。

第一に、表現を通して発見へと導くような指導を心がけるべきである。例えば、算

数の文章題で間違った答えを出した子どもに対し、どうしてそのような答えになったのかを言葉で説明させてみるとよい。そうすることによって、子ども自身がどこで間違ったのかを発見することがあるはずである。なぜなら、言語には思考の過程を方向づけたり整理したりする働きがあるからである。つまり、言語には思考をコントロールする働きがあるので、自分自身の思考過程を言葉で表現させることは、自分の思考過程を客観的に見直すことを可能にし、そのことが自分の考え方の癖や間違いの発見へと導くのである。

第二に、自己表現による個性的な自己形成の指導を心がけるべきである。子どもたちの自己表現力を育てることは、一人ひとりの子どもの個性を引き出し育んでいく上でも重要である。なぜなら、人間は他者という鏡に自分の姿を映すことによって自己の個性を自覚するものだからである。子どもたちも他者に向かって自己表現をすることを通して自己形成を行う。したがって、自己表現力を育てることは子どもたちの自己形成の営みを支援することでもあるのである。

第三に、自己表現をためらう子どもの指導に細心の配慮をする必要がある。表現することは一種の技能であり、他のさまざまな技能と同様に、練習が必要である。最初

は自分の考えや思いをうまく表現できずに、もどかしさを感じる子どもも少なくないであろう。また、恥ずかしさや気後れのために自己表現をためらう子どももいるに違いない。そういう場合には、決して否定的な評価を下さないように留意するべきである。なぜなら、否定的な評価を下された子どもは、失敗を恐れますます自己表現をしなくなるからである。したがって、うまく自己表現できない子どもの場合には、失敗を恐れず積極的に表現するように励ますことが大切である。

第四に、多様なメディアによる表現力の指導を心がけるべきである。従来、表現力の指導は、作文における文章表現力、図画工作や音楽における芸術的表現力など、一部の教科の特殊な表現力に限られる傾向があった。しかし、日常生活では、身振り、表情、動作など身体による表現、イラストや図表などによる表現が必要になることも少なくない。特に最近ではマルチメディアの技術が急速に進歩し、コンピュータ・グラフィックスを用いて表現する機会も多くなった。したがって今後は、もっと多様なメディアによる表現力の指導がなされるべきであろう。多様なメディアによる多様な表現力が身につけば、それだけ表現力が豊かなになり、子どもの多様な個性を表現する可能性も増すと考えられるからである。